回　顧

Robert Sanders 教授

岩　田　　礼

Robert Sanders 先生とは、今年でちょうど 20 年のおつきあいとなる。その最後の 4 年間を同僚として過ごすことになるとは思わなかった。まして、二人で女子学生と一緒にソフトボールに興じるというおまけまでつくとは夢にも思わなかった。

・＊・＊・＊・＊・＊・＊・＊・＊・＊・＊・＊・＊・＊・＊・＊・＊・

大学設置準備委員として国際文化交流学部のデザインを任された時の課題は、学生定員が 80 名、教員数も限られた「学科」規模の学部で、いかに特色あるカリキュラムを構築するかということであった。「観光」は間違いなく特色足り得るだろうが、ほかはどうするか？「国際」を冠する学部・学科は全国に数多くある。同じようにやっていては埋没するだろう。そこで“学生に確固たる学力と人間力を身につけさせる”ことを最優先し、“贅肉は切り落とす”ことにした。そのため、まず教員免許などの「資格」を切った。次に、英語力を身につけさせること。そのために、3 年次まで英語を必修とし、4 年次まで毎年 TOEIC を受験させることとした。そして、いわゆる初修外国語は中国語に特化した。断っておくが、私は中国語教師であっても単純な中国語普及論者ではない。初修外国語は 1 年時に学んでも継続して勉強する学生が少ないという現実があり、「使える第二外国語」を本学の特色としたかったのである。それは中国語でなくてもよいわけだが、現在の国際情勢に鑑みれば、選択肢は中国語しかない。それでも優先順位は、英語＞中国語である。そこで、中国語も英語で教えれば、頭が英語化し、付随して中国語も身についてくるだろうと考えた。

このような目論見を実現し、成功させるための条件は、優秀な教員を確保することである。真っ先に頭に浮かんだのは Sanders 先生のスカウトであり、これに劉乃華先生が加われば鉄壁のチームができると考えた。私の見るところ、お二人は英語圏と中国でそれぞれ最もすぐれた中国語教授者の一人である。

・＊・＊・＊・＊・＊・＊・＊・＊・＊・＊・＊・＊・＊・＊・＊・＊・

Sanders 先生とは、2001 年 12 月に東京で開催された国際シンポジウムの席で、二人の共通の友人であった南開大学の石峰教授を通じて知り合った。当時、先生は東北大学で英語を教えておられ、私は愛知県立大学で中国語を教えていた。その後、断続的におつきあいいただくことになるのだが、発端はいつでも私の依頼であった。

まず、2003 年 4 月に私は金沢大学に転任となったが、同年、日本中国語学会の理事長に選ばれるという不幸に見舞われた。ただ、やりだすと止まらない性分で、学会の会則を全面改定すると

ともに会則の中国語版と英語版を作成した。英語に堪能な会員が少ない学会だったので、会費を3年間無料にすることを条件にSanders先生に英語版を依頼した。

次に、2009年と2012年、私は『漢語方言解釈地図』という二巻の方言地図集を編集・出版した。各地図の解説は、中国語を主としながら、それぞれかなり長い英語要旨をつけたため、英文校閲をやはりSanders先生に依頼した。最初のうちは、執筆者の英作文を先生がまともな英語に直すという形を取ったが、そのうち分量が多すぎて手が回らなくなると、日本語又は中国語で書かれた要旨をそのまま先生に送るようになった。さぞかし時間がかかるだろうと思いきや、我々が日本語や中国語を書くのよりも速いと思われる速度で、続々と英文となって戻ってくるので驚いた。当時は、日本人の奥様が手伝っておられるのだろうと想像していたが、小松で同僚になってそれは間違いだとわかった。先生は教授会での日本語の議論も肝要部分はほとんど聞き取っておられる。曰く、「私は長年、日本語が飛び交う家庭内で過ごしてきた」。

メールでの共通の話題はBaseballだった。Sanders先生はマサチューセッツのご出身で、Boston Red Soxの熱烈な支持者であるばかりでなく、歴代のMLB選手をよく知る「通」である。私はのび太君・ジャイアンレベルの野球少年だったが、野茂英雄が渡米してから、日本の職業野球よりもMLBに惹かれていたので、特に松坂や岡島がRed Soxで活躍していた頃は話が盛り上がった（なお野茂はRed Soxでもノーヒットノーランを達成している）。

そして、最後に、新設の公立小松大学に来て下さった。ニュージーランド・オークランド大学でアジア学科の学科長を務めておられたので、再来日は難しいかもしれないと思ったが、念願が叶って本当に嬉しかった。ちなみに、小松に来た翌年、Vance先生（こちらはMinnesota Twinsのファン）と3人で金沢市民野球場まで出かけ、石川ミリオンスターズの試合を観戦した。

Sanders先生は、ハワイ大学東アジア言語学部で修士学位、カリフォルニア大学バークレー校言語学部で博士学位を、それぞれ取得しておられる。在学中に、台湾大学と北京大学にそれぞれ1年の留学経験があり、中国語は、話す、書く、聞く、読む、すべてに堪能である。かつ、非常にわかりやすい英語を話されるので、本学での中国語教育には最適の人材であった。

Sanders先生は、時としてアメリカ人らしい陽気な一面を見せる。それが本質なのだろうが、反面、平均的な日本人よりはるかに真面目な人である。授業は手抜きがない。学期が始まる一カ月以上も前から教材の準備を始める。試験問題も早々と作る。何事も先に先にと準備される。前日にならないと手をつけない私とは正反対である。コロナ禍が全国を覆う直前に実施されたオークランド大学での語学研修も引率を引き受けて下さった。

私の教育方針に共鳴して、わざわざ小松に来て下さったのだが、快適な教育、研究環境を提供できなかったのは、学部長として誠に遺憾である。コロナ禍は長期にわたってご家族との別離を余儀なくさせ、予定より2年早い退職を決断された。しかし、この4年間の教育成果は、当初私が期待した通りだった。英語と中国語の双方に秀でた学生、英語又は中国語onlyで秀でた学生、それぞれが社会に出て活躍してくれるだろう。これは私の誇りであり、それはSanders先生の献身の賜物であった。